

## 日本近代文学の・mission・

高橋 源一郎

「ニッポン」という、極東の国で生まれた、一つの「文学」ジャンルについて、考えるために、前世紀の偉大な傑作、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』を想起してみる。

・ Many years later, as he faced the firing squad, Colonel Aureliano Buendia was to remember that distant afternoon when his father took him to discover ice.

At that time Macondo was a village of twenty adobe houses, built on the bank of a river of clear water that ran along a bed of polished stones, which were white and enormous, like prehistoric eggs. The world was so recent that many things lacked names, and in order to indicate them it was necessary to point. ・

およそ、百年ほど前、ニッポンの作家たちは、この小説中に現れる「マコンドの住民」と同じ生活を送っていた。つまり、・ The world was so recent that many things lacked names, and in order to indicate them it was necessary to point. ・ というわけだった。

しかし、十九世紀後半、封建的な世界が崩壊して、新しい政府が誕生した時、この小さな東の国は、とてつもない変化を被ることになった。そして、生き残るために、西洋社会の文化を輸入することを決定したのである。かくして、科学技術や社会システムが、そして文化が輸入された。その中にはもちろん、「文学」も含まれていた。そして、西洋の「文学」に直面した時、若い作家たちは「マコンドの住民」と同じ反応をしたのだ。

・ Inside there was only an enormous, transparent block with infinite internal needles in which the light of the sunset was broken up into colored stars.

Disconcerted, knowing that the children were waiting for an immediate explanation

"It's the largest diamond in the world"

"No," the gypsy countered. "It's ice." ・

我々は、彼らを笑うことができる。しかし、時々、わたしは、彼らの方が我々よりずっと幸運ではないか、と思うことがある。なぜなら、彼らには、「氷」という未知なる存在を知る、という想像を絶する体験を味わうことができたからだ。

十九世紀の末に、西洋から大量に輸入された物と言葉と観念は、大きな衝撃を、ニッポンの人たちに、与えた。

たとえば、当時、もっともすぐれた詩人で評論家だった北村透谷という青年が触った「氷」は・Love・だった。

もちろん、誰かを「好きだ」という感情や、「性欲」は存在していた。しかし西洋流の独立した男女の（それが建前かもしれないにしても）・Love・という概念を、その国の人たちは知らなかった。また、同じ・Love・という言葉は、神に対しても用いられた。しかし、当然のことながら、彼らは、神を知らなかった。結局、彼らは、前者には「恋愛」という訳語を、後者には単に「愛」という訳語をあてた。しかし、ほんとうのところ、彼らは、その言葉にどんな意味があるのか、知らなかったのだ。

以来、百数十余年、「ニッポンの小説」は遠くまで来た。西洋から輸入され、翻訳された言葉も、我々に馴染みの深いものになった。たとえば、・Love・も。だが、我々は、また、かつてのマコンドの住民のように、慌てふためいているようにも見える。日本近代文学の・mission・が何であるにせよ、それはまだ果たされていないのである。